

～里山と人との関わり～

里山・・・人が従来の自然を改変し作り出した二次的自然と呼ばれる存在でありながら、多種多様な生物に生息場所を十分に与え、自然と人間が共生している場。

【雑木林】

動物たちには貴重な棲みかたと食料を与え、人には木材資源を与えてくれる森。こうして人が山を手入れ(間伐)することで山の環境が良好に保たれることも。

【ため池】

農業用水として使うために人工的につくられた池。また、魚や水生昆虫などの様々な生き物の住処としての役割も担っている。



【棚田】

稲作が行われる。カエルやドジョウの棲みかにもなり、生物の存在を身近に感じることができる。

【草地】

畑地としての利用が主で、人々にとっては大切な収穫地となっている。収穫物目当てに野生の動物たちがくることもしばしば。

Y & N

11月12日、天気は晴れ。少し暖かく、気持ちの良いくらいの気温の下、里山実習は始まった。今回、実習場所として行ったところは長野県北信地方にあるとある里山。そこでは土地の人々が今も自然環境と強く関わりあいながら生きている。

里山に着くと早速農家の方が出迎えて下さった。里山の管理をできる人が少なくなっている現在、とても貴重な存在だ。その農家の方にこの里山を色々と説明を交えながら案内して頂いた。

お話を聞きながら水田や畑、ため池や近くの林を順々に回っていると、この辺りは本当に豊かな生態系を形成しているのだということを実感させられる。畑にはシカの足跡があり、近くにはイノシシが餌を探し回っていた跡も見られた(写真はカナヘビ)。



ため池を見に土手に行くと足元をトカゲが逃げていき、カエルが慌てて池に飛び込んだ。当然、ため池にも様々な生物が暮らしている。ヤゴやタニシ、どじょうなどの他にも、絶

滅危惧種のシナイモツゴ(下写真)という魚の生息



地になっている。人の手の行き届いたため池は彼らに貴重な生活場所を提供しているが、近年は国内外来種の増加問題や寄生虫による被害も見られて

おり、今後の里山の課題と言えるだろう。

午後は里山の味覚に出会った。大きななめこをふ

んだんに使ったなめこ汁を頂いて、次に向かったのはリンゴ農園。今はふじというリンゴ(右写真)が時期だ。真っ赤に実ったリンゴは里山に住む人々に豊かな収穫を与えている。



このように里山は、生物と人間の双方の利点を生かして成り立っている。そんな里山を一度自分の足で歩いてみるのもいいかもしれない。

K & K